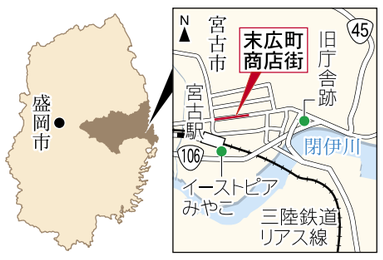
被災地を歩く

10年目のいま～本紙記者ルポ　―16―

宮古市中心部

力を合わせ盛り上げる



東日本大震災の発生から1カ月を迎えようとしていた2011年4月7日午後11時半、復旧したばかりの宮古市中心部のホテルで就寝中、大きな揺れに跳び起こされた。

停電で真っ暗闇の中、防潮堤を乗り越えた「黒い波」が頭をよぎる。津波注意報が発令され、サイレンが鳴り響く。「また来るかもしれない」とすぐさま、浸水区域外にある山口小に向かった。

市内は大きな混乱はないものの、地域住民が深夜の避難所に集まり始め、全員がラジオの情報に耳を傾けていた。県内は震度6弱を観測。約1時間20分後、注意報解除の報に、私も胸をなで下ろした記憶が鮮明に残る。

あれから間もなく10年。15、16年度の宮古支局勤務時代に何度も足を運んだ新川町の旧市役所庁舎跡を2月末に訪れ、歩道橋から眺めた。庁舎が解体されたことから、改めて河口部に近い立地だと実感した。跡地には市民が憩う「うみどり公園」の整備が進む。

庁舎跡地から末広町商店街に向かうと、店のショーウインドーには桃の節句に合わせた華やかな手作りひな人形が飾られ、市民らを出迎えていた。沿岸南部の市町と異なり、宮古市の中心商店街は津波で浸水したが流失は免れ、そのまま復旧を進めて今に至る。昭和の雰囲気が残る通りが魅力の一つだ。

震災や2度の台風被害を乗り越え、中心商店街から地域を盛り上げようと活動する（左から）赤坂真喜子さん、佐々木慶子さん、松原安子さん＝宮古市末広町

「工房の仲間と力を合わせて続けてこられた。商店街のためにもできる限り協力したい」。ひな祭りメーン会場の手づくり工房糸ぐるま代表の赤坂真喜子さん(71)はこう語った。津波でがれきや泥が押し寄せ、営業再開は半年後。現在は新型コロナウイルスの影響で客足の減少に直面するが、にぎわい創出を模索する。

かつて何度も取材した電器店を経営する佐々木慶子さん(76)は「3月11日が近づくたびに、被災当時の風景がよみがえる」と教えてくれた。店内は、腰の高さまで浸水したことを示す印が今も残る。

16年の台風10号豪雨、19年の台風19号豪雨と、震災以降も災害が相次ぐ。「2度も台風の被害が続き、改めて自然の猛威には驚かせられる。避難する意識を忘れないようにしたい」と言い聞かせる。

佐々木さんは女性店主らが集った「昭和通りのおかみさんもてなしたい」の代表も務める。冬はイルミネーション、春から秋にはハンギングバスケットを設置し、復興が進む町を盛り上げようと奮闘してきたが、震災前は100店ほどあった中心商店街の事業者は65店ほどに減少した。

新たな動きもある。18年10月に市民交流センター、保健センター、新市庁舎が一体整備された「イーストピアみやこ」が駅南側に開所した。タクシー会社を経営する松原安子さん(72)は「新しい市役所から商店街に人の流れもできた。若い人がゲストハウスを立ち上げる動きもあり、共に新しいまちを盛り上げていきたい」と、相乗効果を期待する。

この10年、カメラマンとして被災地の変遷を撮影してきた。心に残ったのは、逆境にあっても前を向き、しなやかに歩み続ける姿。今回、宮古の中心部を歩き、その思いを強くした。復興事業を経て新しいまちの姿が固まった今、公共施設や公共交通の基盤を生かした活性化に期待したい。

（報道部・菊池範正）

菊池　範正（きくち・のりまさ）震災時は報道部勤務。宮古支局を経て17年4月報道部次長。45歳。釜石市出身。

足跡

銀幕の光 絶やさない

みやこ映画生活協同組合

震災後も文化の灯を絶やさず、映画上映を通じて復興支援を続けてきた櫛桁一則さん＝宮古市本町

宮古市のみやこ映画生活協同組合常務理事の櫛桁（くしげた）一則さん(48)は東日本大震災後、沿岸各地に出張して映画の無料上映を続けてきた。災害公営住宅やかさ上げされた新たな町に笑いと感動を届け、つながりを生み出す。

震災時は同組合が運営する沿岸部唯一の映画館・みやこシネマリーンの支配人。従業員と施設は無事だったが、がれきの山で捜索が続くまちの惨状に当初は再開をためらった。

その年の5月、配給会社からフィルムの提供を受け、避難所にスクリーンを置いた。「こんなに笑ったのは震災後、初めて」という高齢者の声もあった。映画館では見られなかった反応に意を強くした。

北は野田村、南は陸前高田市、内陸にも足を運び、無料上映は2020年末までに約800回を数える。近年は国の助成を受け、災害公営住宅の高齢者を対象に上映する。終了後も次に見たい映画などお茶飲み話に花を咲かせ、交流のきっかけになっている。

震災から10年。津波で家族を失った人の悲しみは変わらない。「映画で全ての課題を解決できるわけではない」と実感するが、上映会終了後、見送ってくれる人の姿が胸に残る。「見たい人がいる限り何年でもやりたい」と決意する。

みやこシネマリーンは16年に常設営業を終了し、同年に中心部の本町に、旧酒蔵の建物を利用した複合文化施設「シネマ・デ・アエル」が開所した。櫛桁さんも関わり、大手の映画館では配給されない映画を届ける。「宮古は沿岸の中でも商店街を歩く楽しみが残っている。気軽に立ち寄ってもらえる場になってほしい」と思い描く。

宮古市中心部の復興状況

津波で住家・非住家含め全壊908棟、大規模半壊475棟。新川町と本町周辺の市中央通商店街振興組合は組合員52人の大半が被災し現在は36人。16年の台風10号、19年の台風19号でも大半が浸水した。市末広町商店街振興組合は震災前の71人から60人に減少した。新川町の旧庁舎は解体され多目的芝生広場などを備える「うみどり公園」が7月完成予定。市街地の無電柱化計画も進み、将来的に宮古駅前から公園周辺の電線を埋設して歩道を広げ、歩行者中心の道路環境を整備する。

宮古市中心部　10年の歩み

- 2011年3月11日　東日本大震災
- 6月　末広町と中央通商店街で宮古あきんど復興市
- 14年4月　三陸鉄道が南北リアス線で全線運行再開。宮古駅は「開業以来の人手」

- 15年4月　宮古港開港400周年記念事業の開港時代行列
- 16年8月　台風10号豪雨。中心部が浸水被害
- 18年6月　宮古―室蘭の定期フェリー就航（20年3月休止）
- 10月　イーストピアみやこオープン

- 19年3月　JR山田線宮古―釜石間が移管された三陸鉄道リアス線が全線開通
- 6月　旧市役所本庁舎・分庁舎解体開始
- 10月　台風19号豪雨
- 20年7月　宮古盛岡横断道路の宮古港―宮古中央間、三陸道の宮古中央―田老真崎海岸間が同時開通

11年3月11日　防潮堤を乗り越え中心市街地に流れ込む「黒い波」

11年3月12日　津波から一夜明け、旧市役所周辺は大量のがれきや泥に覆われた

15年10月14日　市街地は復旧が進み、河口部で閉伊川水門の整備が進む

20年2月17日　解体作業中の宮古市役所の旧庁舎

21年2月23日　旧庁舎の解体が終わり、市民が憩う公園整備が進む（本社小型無人機から撮影）

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。